

クローズアップ

# NGO・NPO

アジア女性自立プロジェクト

## Asian Women's Empowerment Project (AWEP)

～アジア女性のエンパワメントを目指して～

Close Up

NGO・NPO

アジアの女性たちとつながりたい

子どもの父親捜しのためフィリピンから来日した女性の厳しい状況を知り、日本にいる私たちが自分の問題として、国境を越えて共につながりたいと、一九九四年八月に神戸でアジア女性自立プロジェクト(以下AWEP)を設立。一九八〇年代から九〇年代前半に、アジア各国から仕事や結婚で日本に来た女性たちが、さまざまな問題を抱えて帰国していることを知り、阪神間の女性たちで学習会を持った。女性たちと子どもと一緒に生活できるように、出稼ぎに頼らず、自分の暮らす土地での就業支援から始めた。まず、フィリピンの女性団体と連携し、日本人の父親とフィリピン人の母親の間に生まれた子どもたち(ジヤパニーズ・フィリピーノ・チルドレン＝JFC)を育てている女性たちへ、縫製技術の研究や作業所づくりに協力した。つくり手はフィリピン・マニラ在住の女性たち六人でスタート。出来上がった製品を日本で販売する活動を始めた。

この過程で、AWEP発足後わずか半年後の阪神・淡路大震災がきっかけで、被災した在住外国人とのつながりもできた。製品販売を通して、日本に住んでいるアジアの女性たちと一緒に製品チェックや受発注・翻訳作業などを行い、日本国内で製品を取り扱ってくれる各地の女性グループや店に販路を確保した。フィリピンの製品が順調に、①現地で生産→②日本で販売→③現地へ送金が行えるよ



↑神戸・地球村フェスティバル「アジアの民族衣装ショー」に参加(1998年7月)

うになり、その後タイやネパールの女性たちが作る小規模な製品も扱えるようになった。一九九九年に兵庫県の「コミュニティ・ビジネス」に応援事業の助成を受け、事業として専従スタッフを得て「地域の人材を活用し、利益を地域に還元する」ことが可能となった。アジアの女性生産者へは収入の確保ができ、日本では、地域の消費者へ製品を通して互いの国の状況や社会の構造を知り、経済的な問題が大きいことへの理解に努めている。

### 地域での活動とつながり

活動拠点の神戸事務所では、外国人女性の相談(行政手続きや就労問題など)も行い、希



↑AWE P 日本語教室のレッスン風景

望者にはFAX等を通じて地域の情報を伝えている。昨年は、神戸市とのパートナーシップ事業として、神戸市の広報からのお知らせを多言語で発行した。

また、在住外国人女性向け日本語教室を週一回開き、幼子連れであっても受講できるようにしている。指導者にも開催の意図を理解していただき、日本の生活に必要な会話の練習など、AWE Pに来ることで学ぶ小さなステップアップを目的に行っているが、日本語

検定を目指す受講者もいる。

「アジアを知る会」として連続セミナーを開催し、地域に住む外国人女性が日本での子育てや生活上の不安・疑問などを聞く会やアジア各国の料理教室を開いている。また、時事に応じてアジアの国の事情に詳しい方をゲストにミニ講演会を開き、自治体の支援を得て広報などを通して地域住民の参加を呼びかけ、国際協力への理解に努めている。

年に一、二回のスタディツアーを企画し、取り扱い製品の生産者の訪問と交流や、訪問先のNGOグループを訪ねて、その土地の女性たちが抱える問題を聞いて協力関係を築いたりしている。昨夏の訪問国インドネシアでは、一五歳未満の女子二名へ奨学金の支援を行った。また、二〇〇〇年一二月に訪問したネパールでは、女性たちのビーズ細工工房を見学したり、夕食後に子連れで識字教室に来る女性たちと交流して、そのグループの組織運営や女性が置かれている困難な状況について話し合った。

## マイクロクレジットの立ち上げ

昨年一〇月には、「アジア女性自立支援スモールバンク(AWE P・S B)」を設立し、国外アジア女性への小額融資の新事業を始めた。これは、AWE Pの活動を通して生まれた余剰金(二〇万円)を基金に、会員諸氏に呼びかけて設立。日本での小額な資金が、アジアの国によ

つては起業の機会につながる貴重な資金となるのではないかとこのことから立ち上げた。途上国では、一定額の資金を持たない女性が銀行口座を開設できず(貸付融資を受けられず)、起業の資金がないため状況を変えられない生活を強いられている場合があるからである。貸借関係として、返済計画や書類書き、現地の保証人の確保とハードルはあるが、AWE PのS B事業としても健全な運営のためには必要なことである。

女性たちが活動を通して力をつけ、アジアの女性たちとつながりながら、誰にとっても暮らしやすい街づくりのために、在日外国人の声を関係機関や身近な行政に伝えていきたい。ここ数年は、兵庫県及び神戸市の緊急雇用NPO支援の助成を受けて、これまで述べたような活動を担う人材が確保されてきたが、限られた予算では事業収入から人件費を捻出できると言い難い。活動の安定的な継続に意味があるが、それには官民の協力、会員やボランティアの支えが不可欠である。

### アジア女性自立プロジェクト Asian Women's Empowerment Project(AWEP)

〒653-0052

神戸市長田区海運町3-3-8

TEL&FAX

078-735-6131

E-Mail

awep@tcc117.org

URL

http://www.tcc117.com/awep

クローズアップ

# NGO・NPO

Close Up

NGO・NPO

## スバエク・トリーの会

～倉吉・カンボジア笑顔のかけ橋交流～

会名の由来は、クメール語(カンボジア語)で子ども影絵芝居という意味である。

一九九九年、気の合う地元仲間六人で初めてアンコール・ワット観光に行き、カンボジアの復興に情熱を傾ける一人のカンボジア女性チャン・スレイさんと知り合ったことがこの活動の発端であった。

その後、彼女と連絡を取り合いながら二回ほどカンボジアを訪れ、ポル・ポト政権に破壊された文芸の復興を進めているグループがいくつかあることを知り、アンコール・ワットの美しい夕焼けだけではないカンボジアの悲しい内戦という現実を突き付けられた。

復興に尽力している人たちは、内戦中にはフランス、アメリカ、日本など治安のいい国々に留学という名目で海外疎開をして難を逃れた。それは、国のご両親や家族にもしものことがあった場合でも、その一族の血は受け継がれるという厳しい選択の中から生まれた現象であった。平和な日本では考えられない真剣な留学であったであろうことは、留学した国の言葉が完璧に読み書き話せることで察することができる。

チャン・スレイさんの紹介で、キー・アマリン氏というフランスに留学していたことのある篤志家が私財を投げ打って設立した、戦争孤児の子どもたちの自立に向けた活動を行う施設「クメール民族文化教育センター」を訪問した。

アマリン氏によると、カンボジアにも義務教育という制度はあるにはあるのだが、お金

のない国なので、学生一人当たりに必要な年間一〇〇ドル程度の教科書代と給食代がないために学校に行けない子どもたちがたくさんいるとのこと。このような国情の中、センターの子どもたちは、センターで生活し、学校に行くことを第一にしなから、戦乱により忘れ去られていた「子ども影絵芝居」を復興させようと自分たちで影絵人形を作り、台本を制作し、伴奏まで懸命に練習している。アマリン氏は「彼らは何もしないで援助だけを待っているわけではない。自分たちでできることをして自立したい。カンボジアの役に立ちたい」と語っている。

私たちも何かお手伝いできることがないものかと思案の末、六人が発起人となり、二〇〇〇年三月に「スバエク・トリーの会」を立ち上げ、約五〇人の会員による会の活動が始まった。

何分にも素人集団で、世代、性別、職業もさまざま、すべてが暗中模索の中、まさにボランティア、各人が手弁当持参での活動であったが、鳥取県国際交流財団の協力・支援により一気に活動が本格化した。

二〇〇一年七月に、カンボジアから「クメール民族文化教育センター」の子どもたちを倉吉市に招待し、「子ども影絵芝居」の上演と、倉吉の伝統的な太鼓演奏グループ「打吹童子ばやし」の子どもたちとの合同セッション開催の運びとなった。当日は二〇〇〇人を超える来場者を迎え、公演は成功裡に終わった。私たちはこの公演で一区切りついたと思っ

〔注〕スバエク・トーイの会は、平成一四年度の地域づくり総務大臣表彰「世界に開かれたまち部門」を受賞した。



↑2001年 倉吉公演の楽屋にて

行政からの支援ありきではなく、いかなる団体からの制約や束縛も受けずに、自分たちの合意の上でやれたことが、結果的には多くの成果を上げることができたのではないかと考えている。今回の総務大臣表彰〔注〕により、地方自治体からの支援の約束もいただいているが、今まで同様、私たちはカンボジアと日本の子どもたちの交流機会を提供していきたいと考えている。子どもたち同士で考えた夢を実現するお手伝いをしていくつもりである。いかなる団体からも制約を受けないスタンズで活動を続けていこうと考えている。

私たちの活動は、いつも変わらぬ笑顔で迎えてくれるカンボジアの子どもたちと、見知らぬ国カンボジアの子どもたちを自然体で受け入れてくれた鳥取県中部地区の子どもたちの笑顔によって支えられている。

カンボジアの子どもたちの「日本に行ってみたい」という言葉から始まった小さなボランティア活動が、子どもたちのおかげでだんだんと大きくなっていくのが楽しみである。

### スバエク・トーイの会

〒682-0865

倉吉市越中町2121 山下方

TEL 0858-22-2918

ていたが、彼らが帰国の途についた後、倉吉の子どもたちが「カンボジアの子どもたちと来年カンボジアに行く約束をした」という。そこでまた、私たちの奔走が始まった。せっかくなのでカンボジアに行くのであれば、世界遺産に登録されているアンコール遺跡群で太鼓の演奏ができないかという、常識的に考えれば実現不可能な夢への挑戦であった。結果は、遺跡群を管理するカンボジア政府遺跡保護局との数度にわたる直接交渉を経て、アンコール・トム遺跡の象のテラスでの、

史上初の倉吉とカンボジアの子どもたちの合同セッションが三〇〇人ほどの聴衆の前で実現した。

私たちの活動は、当初は、私たちがカンボジアの戦争孤児の子どもたちを支援するという目的であったが、活動をしていく中で、カンボジアと日本の子どもたちから私たちの方が教えられることの方が多くなっていった。日本の子どもたちは、初めて聞くカンボジア語にもかかわらず、一緒にサッカーをやり、会話をし、ちゃっかり再会・訪問の約束までやっつけてしまい、現在、自発的に文通、文房具の支援が始まっている。そして、カンボジアのアンコール・トムと鳥取県中部地区には共通の天女伝説があることも教えられた。



↑2002年 アンコール・トム遺跡の象のテラスで合同演奏